

---

# 大好きです ~番外編集~

karinko

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大好きです ～番外編集～

### 【Nコード】

N1808H

### 【作者名】

karinko

### 【あらすじ】

『大好きです』 本編を補充する番外編集。 理沙と達也の幸せの裏に隠された悲しい物語や、新しい恋の話。

さよなら、恋心 雪乃side(前書き)

この話は本編の 10話 告白 達也sideまでを読んでから  
読むようにしてください。

さよなら、恋心 雪乃side

『雪乃っ！』

昔から、大好きやった人。

無邪気な声でウチの名前を呼んでくれる。

小さい時から、ずっとずっと、

好きでたまらなかった。

でも、

ウチがどんなに達也のことが好きでも、

達也がウチに抱く気持ちは違っていた。

達也は、ウチをお姉ちゃんやと思ってる…

達也がウチに抱いてるんは家族に抱く気持ち。

ずっと、

昔からずっと、分かったた。

けど、

それでも、どうしても達也を手に入れてしまいたかった。

だから、

まだ幼くて、恋の意味も知らない達也に言った。

『好きっていうのはな？その人を大切に思うことなんやよ？』

達也に自分の気持ちを勘違いさせようと思った。

ウチへの気持ちを恋に変えてしまおうと思った。

思い通り、

達也はいつもの無邪気すぎる笑顔を見せてくれた。

『ふん…じゃあオレは雪乃のことが好きやねんなっ！』

ウチの作戦は成功。

けど、少し覚える罪悪感。

達也の気持ちを捻じ曲げてしまったような…そんな気持ち。

それでも良かった。

達也はかっこいいから…

早くウチのものにしておかないと誰かに取られてしまう。

だから、

達也の気持ちを騙した。

達也はずっとだまされたままでいてくれて…

ウチが中学に入ったとき、

告白してくれた。

うれしかった。

もう達也の気持ちウチが作り上げた偽の気持ちだなんてコト、忘れてた。

そんなうちに、あっという間に達也が中学に入って、

達也のまわりに女の子達がたくさん集まるようになった。

達也もまんざらではないみたいで、女の子達の相手をするのに夢中で…

ウチの相手をするのなんて二次。

悲しくて、苦しくて、

達也が他の女の子と話しているのを見るだけで苦痛になってしまっ。

そんな悲しすぎる毎日の中で、

ある日、達也よりもかっこいい人…三上くんが転校してきた。

達也のまわりにいた女の子達はみんな三上くんの方に行っちゃって…  
落ち込んでいる達也のそばに、いてあげた。

達也は喜んで、もう一度ウチのことが好きやと再確認したようにすりよってきて…

ウチはだんだん調子にのってきた。

達也はウチだけのもの。

達也は絶対にウチのもとからはなれへん。

そう思ってた。

そんなとき…

いきなり、三上くんに告白されて…

もちろんウチは達也のことが好きやったから…

三上くんのことを好きになるってことは絶対なかった。

けど…

調子にのってたウチは…

達也をこらしめてやるうと思った。

そんなことさえ思わなかったら…

達也はずっとウチのそばにいてくれたのに…

『もう達也と付き合ってもステータスにはならないって気づいたんだ。だって達也より三上くんの方がカッコいいから。』

まさかあれだけの言葉で達也がそんなにショックをうけるとは思わなかった。

達也は、ウチからはなれていってしまった。

けどやっぱりウチは達也のことが好きで、好きで、好きで…

あふれる気持ちがおさえられなくて…

達也を追いかけた。

たった3日間。

達也に気持ちを伝えるには十分。

思い切って達也に思いを告げ直すと達也はウチを許してくれた。

もう一度、ウチを好きになってくれた。

…そう思った。

だけど、ちがったんや。



達也にはもう、新しい好きな人がいた。

立川さん…

達也が、ホントに恋した人。

けど、ウチのせいで達也は自分の気持ちに気づけてなかった。

ウチのことを好きだと勘違いしてるせいで、達也は悩んでた。

達也が立川さんのことを好きだと気づいた時にはめっちゃショックを受けた。

なんとか達也をウチのもとに引きとめようと必死になってた。

心の中に浮かび上がるのは…

達也を失いたくない…

達也が悩んで苦しむ姿を見たくない…

相反する、二つの気持ち。

そして、

結局ウチは達也の幸せを願った。

達也に自分の本当の気持ちを気づかせてあげた。

『ああ…ごめん、雪乃。オレは立川のが好きや。』

そう言われたとき、

どれだけショックで悲しかったか、あなたにはわかる???

達也はウチのことを本当に好きじゃなかったかもしれない。

けれど、

ウチは本当に達也のことが…大好きやったんよ???

立川さんの後を追うあなたを呼びとめたかった。

いつの間にか、ウチよりも大きくなったその背中にしがみつきたかった。

けど、

そんなことをすれば達也が困るだけ。

自分が苦しいのは嫌…

でも、

達也が苦しむ姿を見るのはもつと嫌…

大丈夫。

ウチは弱くない。

達也がいなくなっただって…

全然平気。

あなたの後ろ姿を見送る。

つう…と、我慢していた涙がこぼれおちる。

後ろには、大阪に続く電車がきていた。

涙を拭きとり、電車にのる。

…達也の気持ちをだまし続けていれば、

今頃、目の前に達也がいるはずなのに。

「…達也あ…!!」

ホントは平気なんかじゃない。

ウチには達也がいないとダメ。

達也はウチが生きていくのに一番必要なもの。

失いたくない。

立川さんにわたしたくない。

「達也あ…戻ってきてや…なあ!!」

達也がいなくなった駅のホームに、

聞こえるはずのない言葉を必至で叫ぶ。

…わかってる。

さよならしなくちゃいけないんや。

達也のことは忘れなければいけない。

きっぱりと忘れることはできないと思っけど…

それでも、

達也が困らないようにがんばるから。

次に達也に会うときは…

いつもの、満面の笑みで。

この気持ちとは今日でさよなら。

さよなら、さよなら。

ウチの小さな恋心。

さよなら、恋心 雪乃side（後書き）

雪乃side、書きたかったんです！

この小説で、ばんばんと他のサブキャラ目線での話を書いていきたいと思います！

雪乃…かわいそうです…

ちっちゃい頃から好きだったのに…

新しい恋 美香 side

初めて斎藤くんを見た日。

一瞬で一目惚れした。

それからずっと大好きで、大好きで、

けど、斎藤くんはみんなに人気があるから…

私の方なんて見てくれない。

それでも、

少しでも私を見てもらおうと必死だった。

必至になって、毎日毎日斎藤くんを囲む女の子たちの中に入っていた。

理沙も、私を応援してくれてると思った。

そう思ってたのに…

『知ってる??斎藤ちゃんと立川さんが昨日一緒にいたんだって!』

『えっ…??』

うそだと思った。

理沙にかぎって私を裏切るはずがないと思った。

だって理沙は親友だもん。

私を応援してくれてると思った。

それなのに…

それなのに…

『……………』

『…ああ！昨日からな！』

黙っている理沙と、うれしそうな斎藤くんの言葉。

頭が真っ白になった。

ただひとつ、浮かぶ言葉は理沙が私を裏切ったということ。

ひどい。

憎い。

悔しい。

苦しい。

悲しい。

胸がいつぱいいつぱいになって涙が止まらなかった。

今思えば、私があんな気持ちになったのは斎藤くんをとられたからじゃない。

信じていたはずの理沙が私を裏切ったから

それから斎藤くんを好きだった女の子達が理沙をいじめはじめた。

私も最初のうちはそれに加わってたけど…

理沙が傷つくのを見ているうちにだんだんそれを見るのが辛くなつて、

休み時間でも理沙としゃべれないのが苦痛で、

理沙の笑顔を見られないのが苦しくなった。

そんな毎日の中、

偶然廊下で斎藤くと理沙が一緒にいるところを見た。

満面の笑みで斎藤くんに笑いかける理沙。

私は最近全然見てないのに…

なぜか斎藤くんが憎いと思った。

私は斎藤くんのが好きで理沙のが憎いはずなのに。



私は理沙と斎藤くんの仲に嫉妬してた。

理沙が斎藤くんに笑顔を向けるのが許せなかった。

だから、みんなと一緒にになって理沙をいじめた。

…おかしいよね？

私もなぜそうしたのか意味がわからない。

けど、そのときの私はおかしくて…

理沙がいつぱいいつぱい傷ついて斎藤くんにも笑顔を見せられないほど傷つけばいいと思った。

理沙が傷つくのを見るのは辛いはずなのに…

私は自分自身の気持ちが多からなくなっていた。

そしてあの日。

体育の時間。

途中で理沙の姿が消えた。

最初は気分でも悪くなって休んでるのかな？って思った。

けど…

理沙は体育の授業が終わってからもういなかった。

教室に戻ったとき、

小倉さんが何かの鍵を指先でくるくると回しながら女の子達とくすくすと笑ってた。

『今ごろ立川さん、体育倉庫の中でどうなってるんでしょうね？？  
斎藤くんをとったこと1人でじっくり反省すればいいのよ！』

体育倉庫…！！

小倉さんの持っている鍵がどこの鍵なのか気づいた。

もしかして理沙はそこに閉じ込められてるの…??

助けにいった方がいい？

けど…

どんな顔をして理沙と会えばいいのかわからない…

それに…

理沙をこのまま閉じ込めておけば…

理沙が斎藤くんのそばに行くことはできない…

私は理沙を助けにいかなかった。

そのまま、平然と次の授業に参加してた。

だけど…

授業の間、ずっとずっと理沙のことを考えてしまつた。

今ごろどうなってるんだろっ？

一人でさびしくないかなあ…???

死んじゃってたらどうしよう…!!

そう思うと授業なんか受けてられなくって、

そしてその時、気づいた。

私にとって理沙は…

斎藤くんなんかよりも、大事で必要な人なんだって。

このまま理沙と友達じゃなくなっちゃうなんて嫌だ。

もう一度…

理沙と親友って関係に戻りたい…!!

授業が終わってすぐ、こっそりと小倉さんの机の中に入ってた体育倉庫の鍵を盗った。

そして急いで体育倉庫に走る。

理沙に会うのが怖くって、涙がいっぱいでした。  
けど、走った。

はやく理沙を助けなきゃって、

その気持ちでいっぱいだった。

そして急いで体育倉庫をあけて…

そこには理沙となぜか斎藤くんもいて…

理沙を見た瞬間、余計に涙があふれだした。

『理沙あ…ごめん…ごめんねえ…!!』

必至で謝った。

理沙も私に謝ってくれて…

そのあと、教室で話しあって、私達はもう一度親友に戻った。

その日、

私は誓ったんだ。

もう斎藤くんはあきらめる。

私は理沙の恋を応援するって。

理沙のためなら、斎藤くんなんてすぐにあきらめられた。

けど理沙は気を使ってくれてるみたいで…

私のまえであんまり斎藤くんの話はしない。

けど理沙に気を使わせるのは嫌だから…

はやく新しい恋を探さなきゃって思った。

そんなときに…

あの人、私に声をかけてくれた。

吉沢くん。

最近いつつも斎藤くんの隣にいた人。

理沙と斎藤くんが話しているとき、

なんだか入るのも悪い気がしたから、いつもぼーっとしてた。

吉沢くんも同じ感じで…

ふいに目があった。

吉沢くんは私に笑いかけて急に私の腕を引いた。

斎藤くんと理沙は会話に夢中でそれに気づいてなかったみたい。

中庭まできて、吉沢くんは止まった。

「な…何??いきなり…」

「おまえって斎藤のこと好きだっただろ??」

私の言葉をさえぎるように言う吉沢くん。

少し戸惑って、小さくうなずいた。

「あそこにいるの、辛いかなーって思ってた。」

吉沢くんは私に笑いかけて気づかわしげに言った。

…私に、気使ってくれたんだ…

でも、私ったら全然関係ない人にまで気使わせちゃってるんだな…

「…大丈夫だよ。もう私斎藤くんのことあきらめたし。」

「そうか?まつ、いいや。あそこにおいても暇だし、暇人同士しゃべろうぜ!」

暇人同士って…

一緒にしないで欲しいな…

…でも、

ちょっと面白い人なのかも…!!

それから私達は理沙と齋藤くんが鉢合わせしたときには2人でしゃべるようになっていた。

思ったとおり吉沢くんはおもしろくって…

齋藤くんみたいにすごいかっこいいってわけじゃない。

けど、私がまだ齋藤くんのが好きなんじゃないかっていつも気使ってくれてて、

そんな優しくて、おもしろいところにいつのまにか惹かれていた。

齋藤くんを好きだって思ったときは別の、

あつたかくて心地よい気持ち。

吉沢くんといるとそんな気持ちになれた。

齋藤くんに恋してたときとは違う。

あの切なくて苦しい気持ちじゃないの。

私は新しい恋を見つけた。

小さな、小さな、あつたかい恋。

その吉沢くんと付き合うようになったのは、また別のお話。

新しい恋 美香 side (後書き)

美香が理沙大好き女の子になってしまいました。

また話がよくわからなくつてすいません(T|T)

そしてたまに登場していた吉沢くん。

もしかしたら重要キャラになるかも…!?

でもあの人のキャラはよくわかりません。

これから固めていくつもりです(汗

でわまた本編も読んでください>m(\_\_\_\_)m<



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1808h/>

---

大好きです ~番外編集~

2010年10月12日02時09分発行